

東九州支部報



雪の久住山頂より天狗ヶ城、中岳

《 もくじ 》

玉山(YUSAN)登攀	1
沖縄県最高峰	
『与那覇岳』登山	3
故釘宮登氏追悼登山	4
樺木山から御所峠へ	5
登山と地球環境	6
印象に残った山の本	8
年次晩餐会病	8
支部事務局担当者会議	9
五月月例山行のお知らせ	9
後記	9

玉山(YUSAN)登攀

三人行脚紀行

佐藤正八

なぜ台湾の山などにと、よく聞かれる。簡単に登れると思いい昨年暮れにそれ相当の準備をして台北に訪ねた。中華民国登山協会の事務所を探し、国際部長の謝さんにお会いしていろいろ情報を得てみると三〇〇〇m以上の峰が一〇〇におよぶ、しかも環境庁にあたる機関の許可と目的の山城登山許可を取らないとその三〇〇〇m級の山には登れないという訳で台北市近郊の山に致し方なく登った。それでも千数百m級の山はたくさんある。

登山協会の定例山行会に参加しようと集合場所の台北駅に行き案内で乗り換えなど訪ねてみると背の高い老人が急に割り込み、事情を話すと私の登山の会の方に加わりなさいとやや強引に誘った。その人が後にいろいろお世話になる江良徳という台湾人である。六七才で日本語が大変うまく司馬遼太郎の本を愛読しているのである。駅の西側に横付けしてあるバスにはすでに五〇人近くの会員が乗り込んでいて混雑していた。

一路南に向かい三峽の満月円峽谷に入り東眼山に向かう。正月と言うのに溪流の岸辺はシダが日本の五月のような伸びようであった。九州より少しだけ大きい中華民国(台湾)に四つの国家公園(国立公園)が南北に配置されそれぞれの中心に各地を代表する山群と峰が連なる。ちょうど中央部に位置する山が玉山(YUSAN)である。日本支配のおりには新高山と呼ばれていて開戦暗号として使われた名称は有名である。富士山より2000m程高い3952mの台湾の最高峰である。

かつては大分県山岳連盟の先輩たちが海外遠征の登山として最初のころ訪れた山で、円の固定相場時代のあこがれのひとつであった。今や近くてを遠い山の感もするが決して捨てたものでもない。(次ページへ)

台湾も日本と同様、中高年の登山者が多く自然環境が危うくなりつつあり、事故者も少なからずある。そこで山に登る条件が厳しくなった。今回はグループ三人以上、ガイドをつけるなど必要事項を準備して中華民国登山協会海外担当事務局に一ヶ月前までに文書、電話で依頼をした。国際部担当の責任者は張玉龍さんに変わっていた。

年度末とあって飛行機の便の調整で一二月二五日のフライトになり大分を朝六時五五分発のJRシーガイアで早朝より自宅の大野町から来て来た児玉会員と発った。別府駅で三人目の会員で協力なメンバーである後藤利雄先生が乗り込む。

九時五〇分発の台北行きのキヤセイにて一時間時差で午後一時〇五分台北空港へ着く。大荷物なのでタクシーで市内へ向かうと思うていたが連絡をとった江良徳氏がもつたいないからバスで来いというので一人一三〇元台湾ドル(¥四八〇)を払い四〇分ほどの台北駅に向かう。一年振りだったが待ち合わせの場所では江氏は私をすぐ見つけ再会の握手をした。その後は任せ山の準備の買い出しや、その日の宿泊もお願いし、北部陽明山近くの彼の豪華な別荘で温泉を楽しみ簡単な夕食と日本からの酒で過ごした。

翌二六日(日)早朝より江氏のたしなみの陽明山公園への散

歩に駆り出され約二時間のメニューを過ぎ、やつとありついた朝飯は市営公共温泉隣での市場簡易食だった。昨年と同じだった。

早々に山をバスで降り、登山協会に頼んであった宿舎剣たん青年海外青年活動中心(ユースホステル風)に荷物を預け、三人でまず訪ねるべき故宮博物館に向かう。丸山円ホテル直下の貫道から一五分位タクシー一〇〇元で谷あいにはそびえる周囲が森の小高い丘下に着く。正面玄關すぐ横である降りたのが一、二時ちよつと過ぎだった。相変わらずの混雑を知っているので早めの昼食を西横にあるレストランで済ませることにした。やつと台湾料理が食える、フリーセレクトメニューから三人それぞれを選び、つまみ合せて安いワインなどで緊張をほぐした。

北京の紫禁城を経験しているがためにここを見なければと訪れて三回目の私は概略をほぼつかんでいたのでポイントのみを絞って望んだ。初めての二人には自分の視点で鑑賞していたきたいと時間、疲労の具合をみて最上階の喫茶店で待った。膨大な作品群とこつた返す人に疲れるのである。

二七日(月)約束の打ち合わせで中山公路の山岳協会の事務所で張国際部長(六五才)に初めて会う。契約の内容の確認に午前中を費やした。途中ガイド

の王三郎氏を紹介され後は彼に総てを任せることになる。五五才の彼は日本語は話せないが名前からして日本名である。つまり戦中の名残りと言うか両親とも日本形式でことをなしたの理由である。職種を変え、好きな山に登る求めたなりわいがタクシーの運転手だ。

本人が主張するのは格式のある台湾登山協会の理事でありガイドである。台湾の険しい山行企画の重要なメンバーとして活躍した山歴を張国際部長の折り紙つきだ。つまり早速彼のリムジン(サブワックタクシー)に張りつめる程登山道具積み込み目指す玉山に向けて台北を発った。

高速道路のメイン西路線を昼前に出発、昼食は途中のサービスエリアでとる。しまつた例の飲み物はないんだと思ったのは二人だけ。飲酒運転は厳罰失職一人、後は不明。ひたすら南下。台湾の運転事情は司馬遼太郎の本の台湾の冒険にでてるので解るがガードレールのこんな跡を見ればスゴイなあと思った。嘉義で国道一八号を東に込み入った街を夕刻に近い時間を抜けた。

高度が少しずつ登り始めると田舎の風景がしきりに南国のヤシ、パイナップルの畑、さらに阿里山は茶畑の段々丘、沈み行く夕日が西に心を弾ませる。もうすぐの阿里山青年活動中心宿

泊地に着いた時には星が輝きかけていた。彼の有名な阿里山鉄道のレールを車底をこすりながらそこに着いた。筆談の夕食は費用の中だったが実につましい思いが明日からの登山者としての自覚を促してくれた。設備は今風木造でいい印象だった。時刻設定を告げられ胸が沸く。

二九日(火)当然暗い内の準備で一路登山口まで走る。朝食は高度二六〇〇m遠くに阿里山の峰が見える上東埔停車場甲にて手持のライターでそそ草と済ます。いよいよ出発した。立派な車止めを横にアスファルト道を歩いて二〇分登るとしようしやな建物に王さんが書類をもつて久しぶりの友人を訪ねるように入つて行つた。

入山許可を受け付ける現地の警察署である長野や立山のそれだ。寝袋、アイゼン、羽毛など持参したがこの天候では不要、有り難い。九州の春山の雰囲気だが空気がちよつと薄く、快適だ。手慣れた王さんの仕事でものの一〇分もかからずさあこれからだ。さらに歩道に靴底を減らすこと四〇分、原生林が入山していることを峡谷の風景があちこちの方角に深みを落としている。

朝の光が陰影をみずみずしくコントラストをレンズの前に出してくる。一つの峠を降りると塔塔加鞍部だ。いわゆる玉山の正登山口だ。一休みしてこれ

から登るルート、峰々、それらの谷西から望む稜線は逆光だが確かな目の中にある。予定の時間九時三十分スタート、整備された登山道は日本アルプスのそれと全く同じ。南方ゆえ道々の花はまさに台湾である。知つていてもそこを見ると私は台湾の山にいたんだなと感じた。日本のなつかしさが一時間の時差と緯度の違いで感じられる。

一〇時一五分「孟緑亭」三〇〇mで休憩。だんだん暑くなり上着を脱ぐ。「前山」(三二九三m)、「鹿林山」(二八六八m)、「小南山」(三五八二m)を見ながら登る。一時五〇分「西峰下山小屋」着、休憩。ちよつとした舞台になつていてここから玉山主峰が見える。



(玉山西峰下山小屋にて 後方玉山山頂)

天気も快晴ではつきりと頂きが堂々とした感じでそびえている。

今日の泊予定の「排雲山荘」(三四〇二m)一四時〇五分に着く。戦後すぐに建てた山小屋で五〇年になり老朽化のため来年度新築の予定だという。二、三人の男が焚火をそばに中国将棋をやっていた。台所で王さんがラーメンを準備してくれた。時間もまだ余裕があるし、明日の天気はやや危ないので今日の内に登ろうというので一五時〇〇分山頂へ出発。

森林限界を過ぎガレ場をゆつくり登り、やがて西側の上部稜線へ景観は一段とよくなるがガスが少しずつ出たは消えたりしだした。北峰との出合いからは風も出たきた。岩場とクサリ場をいくつかあえぎながらよじ登る。一七時一五分「玉山」(三九五二m)山頂着。一等三角点を囲み例によって万歳三唱、握手を交わし山頂碑をバックに写真を撮り、一七時二五分下山開始。一八時四五「排雲山荘」着暗くなっていた。

二日分を一気にアルパトしたせいで短時間の高度体験で頭痛と疲労で後藤、児玉先生はかなりのダメージを受けた様子。児玉先生は食事を取らず布団にもぐる。山荘は五〇人位は泊まれ奇麗ではないが一応布団もあるトイレや台所も整備され伝統のある登山基地として随分利用されている。



(玉山山頂碑)



(玉山山頂より)

東方を望む)

二月三〇日(月)快晴。七

時三〇分起床。軽く朝食を済ませ八時四六分下山開始。同じコースを下り一二時三〇分鹿林山警察派出所に下山届けを出して一二時五〇分駐車場着。荷物の整理をして車で一分程の「玉山国家公园塔塔加遊客中心(ビジターセンター)」にて昼食。玉山を背にしながら一路北西に向かう。昨日の予想に反して黄砂が少し舞うものの快晴である。中央山陵を延々とひたすら走り合歡山を越え花蓮の宿に着いたのは一七時三五分だった。帰国の飛行機を一月三日に予約してあったので、初めての台湾を経験する後藤、児玉両先生は後の旅を楽しんだようだ。続いている詳細な報告書は児玉先生がカラー写真入りで立派な冊子を作成されているのでそちらで一読して頂きたい。

沖縄県最高峰

「与那覇岳」登山

(四九八m)

児玉章良

二月五日(金)～八日(月)、「第三〇回全日本高等学校選抜ホッケー九州大会」で沖縄に行ったときは、時間を見つけて

会場近辺の山に登っている。今回も沖縄ということではどの山に登ろうかと思っていたら、幸いにも、西日本新聞連載の「九州百名山」で沖縄県最高峰の「与那覇岳」が載っていた。この記事を頼りに七日に登った。あいにく沖縄は曇天で例年になく寒く、ジャンパーを着るぐらいであつたが、七日は晴天で半袖でもよいくらいであつた。

生徒二名をつれて今帰仁(なきじん)村のホテルからタクシーを呼び国道五八号線をひたすら国頭村(くにがみそん)辺土名奥間へ。ここから山原を南北に横断する大国林道に合流する地点まで登り駐車。(普通は奥間で降ろされるのだからが本土からわざわざ山登りに来たと言つたので、いろいろ道を聞いて

くれて、車が登れる林道合流点まで行ってくれた。さらに、登って戻ってくるのを待っていてくれた。待ち料金は取らなかった。人のよいおじいさん運転手であつた。実際、待つてもらわないうと国道のバス停まで歩いて降りると一時間以上はかかるし、バスの便は非常に悪いそうだ。タクシーでここまで五〇分、約八〇〇〇円であつた。標高三二〇mである。ここからすぐ未舗装の林道を歩き、約三〇分で林道終点。ヤンバル自然保護の会の記念碑があつた。ここからいよいよ山へと入って行いった。赤土の滑りやすい細い道である。

あまり人が登った様子はない。やがて一五分もしたら最高地点五〇三mと書かれた看板にであつた。ここが山頂かと思つたが道がさらに続いていたので進んでみた。約五分ぐらいで山頂に着いた。一等三角点があつた。山頂は残念だがリュウキュウチクに覆われていて何も見えない。ただアルミのハシゴが高い木に掛けられていて、それに登ると景色が見渡せる。ただ単に樹海が見えるだけ。タクシーが待つてくれたので早々に山頂を後にして下山。往復一時間半ぐらいであつた。

ちょうど緋寒桜が満開で綺麗であつた。また、ヘゴの木やシダ類など亜熱帯の植物に覆われていて、本土では味わえない奇妙な雰囲気のある静かな山であつた。この時期はハブもなりを潜めているそうである。二月、三月は天候が安定していて最適だそうである。

「山原(ヤンバル)」とは国頭村、東村、大宜味村にまたがる標高三〇〇m～五〇〇mに及ぶ山岳地帯の通称。



故釘宮養氏

追悼登山

一月月例山行報告

加藤 英彦

一月二四日(日)前夜来の久しぶりの雨音で目を覚ます。予報では天気もあがるということで出発する。

昨年十月二五日、享年九三歳にて他界された故釘宮登さんの追悼登山ということで、氏がその山開きを提唱された高崎山を追悼の山として選んで一月の月例山行とした分けである。案の定、駐車場に着くころには雨はほとんど小降りの状態となっている。総勢一六名となる。

この山も数年前から大分市が開発の一つとして立派な登山道を新設し、まったく山登りといった感じではなく、ちよつとしたハイキングコースとなつてしまつた。山頂近くには防塁や建物跡など中世に築かれたとみられる山城の遺跡がみられる。貴重な文化遺産の山でもある。

ほんのひと登りで山頂へ。山頂では例によつて、会員一同で三角点を囲み追悼登山のかけ声とともにヤッホーを三唱する。のろし場跡を見て天候の具合を見てすぐに下山。追悼会を昨原

神社にて行うことになり、会場を移す。昨原神社の参拝ののち、神社に一隅にある参拝者休憩所となつてゐる小部屋を借りて追悼会とする。大きな遺影の写真を飾り黙祷のあと、遺族より今日ののために頂いたビールとジュースにて乾杯。その後参加者一人一人が順番に釘宮さんとの思い出を一語づつお話しして、山の大先輩を偲ぶ一時となつた。最後に全員本日(日)の記念にサインをして解散となつた。帰路は影の木にある極楽温泉へ入つて早い帰宅となつた。

この追悼会のすぐ後に、西さんと釘宮さんの住んでいた金池の自宅を訪問する機会を得た。なんでも、長く一人で居住していた自宅取りこわすということ、早速訪ねてみた。以前から話には伺つていたがその家を訪ねてみて、あらためて釘宮さんの山に対する思いの深さを感じた。

なんととっても残された資料のぼう大さ。そしてなんと、その資料の几帳面なこと。ただただ驚くばかりである。これだけ多くの資料を遺族としては維持して管理していくのが無理なため、氏の遺言により別の場所に移すとのこと。全く一つの山の博物館でもできそうな資料である。

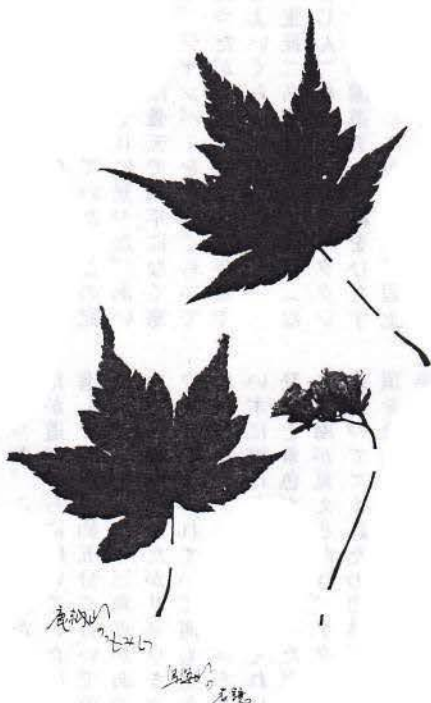
案内した家族の人が一つのダンボール箱をあけて見せてくれ

た。なんとその中には山のスケッチが、一つ一つていねいに描きあげた山の姿があつた。そして、そんなスケッチだけのダンボールでも六箱もあると聞かされて、その根気にはただおどろくばかりであつた。

母屋と離れた裏手には小さな小屋があつた。家族はそれを「山小屋」と呼んでいたが、その「山小屋」がまたすばらしい数の山の石が棚にそろえて一つ一つこの山の石であると記して並べられていた。小屋には信州から取り寄せたという白樺の木が配置されていた。この小屋の中でいつも山のことに思いをめぐらせていたんだと思うと、又楽しい一時を過ごしていたんだと思わずにはいられなかった。氏の年賀状は全くの手づくりである。その年賀状に使用したとみられる「賀正」よ彫つた木片があつた。氏から頂いた年賀状を今でも保存しているが、まったくそのもので印刷したものがあり、「もみじ」や「岩鏡」といった植物を押し花にして年賀状に添えてあつた。(コピー参照)

最後に書斎の床の間に張つてあつた歌を紹介してみる。それを読むにつけ、氏の偉大さを認識した次第である。

心からのご冥福をお祈りします。



加藤様



樺木山から御所峠へ

二月月例山行報告

飯田勝之

二月の月例山行は別府湾リレ登山のルートの中の樺木山から御所峠の間を縦走しようという試みである。リレ登山ルートの中でも最も困難で長いルートであり、この日の計画も『行けるところまで行ってみよう』というコンセプトであった。

朝七時にサニーに集まったメンバーはこの日初顔の人も入れて総勢二名で、ルートの定かでないヤブこぎ山行には、いささか賑やか過ぎると思われるほどの大パーティーである。車七台に分乗し、うち三台は御所峠に直行して、峠に車二台を置いて樺木山の登山口となる町道木佐上大志生木線の中尾ダムの上の峠へ。

八時四〇分、峠で再び全員勢揃いして「樺木山登山口」の標識の所から登り始める。送電線鉄塔の下を過ぎ二五九mのピークを越すと前面の木々の間に高く端正に尖った樺木山の頂上が見え始める。朝日をバックに聳える姿は高度差二三〇m足らずとは思われないほど高く見える。緩やかなアップダウンの尾根づたいに、照葉樹の中を登っていくとやがて尾根を避けて左(東)側から来ている古い林道

の跡の道になり、更に進んで二度ほどジグザグ登りの後再び尾根上に出て、アオキの樹林をはいくぐりながら登って行く。尾根が山腹から分らない広い斜面の地形となり、再びヒノキの造林地となった。登りはじめて四〇分、斜面が急になり休憩を求める声も出たのでヒノキの下で小休止し、再び登っていくとそこからわずかな数分足らずで山頂に着いた。



(樺木山頂にて)

ヒノキの造林地の中の山頂は、古い厳めしい書体の一等三角点があり、東側の一角が伐採されて大志生木、関の方が手に取るように見わたせる。山頂で恒例の今西流万歳のあと、改めて全員自己紹介をして、安部、佐藤(正)両先生はそこから下山し、

御所峠に回って縦走隊を迎えることとなった。残る一九名はいざ縦走へ。一旦休憩地点まで下り、そこから尾根であるう方向に向かい進み始める。すぐにアオキの樹林の中となるが、もちろん踏み分けもなく歩きやすい所を適当に下っていくといきなり立派な道に出会った。何と我々の登ってきた道に出たのである。少し登り返して再度アオキの樹林に踏み込む。

樹高三、四mほどのアオキの中は全く視界がきかず、ただ目の前は何処までも続いている。アオキのジャングルで、ほぼフラットに近い広い斜面は何処が尾根か皆目見当がつかない。分かるのは磁石の針が示す方向だけだが、現在地が掴めなければ手の施しようがない。アオキの中をあちこち徘徊しながら手がかりを探すこと約一五分間。しかしこのままこの茫洋とした樹林の緩斜面を一九名の部隊が彷徨いては危険な状態になりかねない。共に先頭を行く野村教授と相談してとにかく元のルートに引き返して下山することにした。

時刻はまだ早い。諦めがたい気分を下つていけると四、五分下つたところの左側にわずかな踏分が見つかった。踏み込んでみるとそこはアオキのブッシュ帯からそれた照葉樹の二次林となっていて、木々が切り開かれた

跡はどうやらそれは何かの境界らしく、わずかに開けた視界で見ると両側が低く、稜線上であることがうかがえる。ほぼ間違いないしと見て緩い斜面を下っていく。再び猛烈なアオキのジャングルとなる。引き返すことを考えて絶えず枝を折って目印を付けながら下っていく。

半ば山カンでアオキをかき分けつつ下っていくとひよつこりとスギの造林地と自然林との境に出た。そこが稜線上であることが分かり自信を持つて進む。境に沿って少し行くと再び照葉樹の林の中となり、下りにさしかかる。木々梢の向こうに高い稜線が見えその稜線に向け一旦大きく下り、急斜面を這うようにして登り返すと、登り着いたところは東西に長い稜線上である。稜線の北側はスギの造林地、南側は照葉樹の自然林である。造林地の中を稜線に沿って緩く登っていくと所々に村有林境と彫り込んだ花崗岩の石柱があり、北側のスギの木の間からは朝の登山口の後方にあったアンテナのピークが見えた。まだほとんど距離を稼いでいないことが分かる。地図上の四五〇mの広い台地状の所を過ぎ、再びアオキの多い樹林の中に踏み込んで、稜線上とおぼしき緩斜面を下っていくと突然に空間が開け、前方に高いピークが望まれた。「アレッ、あんなに高い稜線が行く手あつたっけ。」よく見る

とそれは降りてきたばかりの樺木山なのだ。前方には臼杵湾が開けている。南に進路をとりすぎたのだ。軌道修正して西に進む。

縦走路上で最も低いコンタ二八〇mの鞍部に向かって下っていくと、右手の木々の間の下方に真近く集落が見えてきた。始めはそれを木佐上の奥の集落だろうと思っていたが、よく考えるとあまりにも近い。地図をよく見るとそれは佐志生の奥の大久保というところであることが分かった。その更に奥の藤ノ尾という集落もはるか後方に遠く見える。だとするとまたも尾根を間違えているのだ。よく見ると右手遠く木々の間に主稜が見える。再び軌道修正だ。ほとんど水平にトラバースするようにヤブを進む。二度ほど枯れ沢を過ぎ、急斜面をよじ登ってどうやら主稜に出たところで、丁度木漏れ日が落ち葉に散らばる気持ちのよい緩斜面があり、時刻も一二時五分前になっていたので昼食休憩とした。

休憩中、野村教授とともに地図と高度計と磁石と樹間から見える遠くの稜線とで現在地を断定し今後の行動を相談する。距離的には御所峠までの全行程のまだ四分の一足らずしか進んでいない。時間はしかしすでに二時間を要している。このぶんだと、これまでのような深いヤブと不明確なルートが続けば暗く

なるまでに御所峠に着くことは難しいかもしれない。暗くなつてこの大人数でヤブを進むことは危険である。途中からのエスケープコースを考慮する必要がある。その場合考えられるのは次の三二九、〇mの三角点付近から大久保に下るか、または更に先の四四三、五mの三角点付近から藤ノ尾に下り、佐志生の駅に行くのが最良のようである。次の三角点までが距離にして全行程のほぼ半分、更に先の三角点までが三分の二である。それぞれの地点の通過時刻でその後の行動を判断することにした。

ゆつくりのんびり昼食休憩としたいところだが、後のことを考慮して三〇分ほどで早々に再スタートとした。

木漏れ陽で明るい林床の緩い傾斜の斜面の下りは、さほどヤブは密でなく歩き易い。稜線を間違えないように絶えず気を配りながら進むと間もなくヒノキの造林地との境に出た。稜線を境としたその造林地の中を進むうんと歩き易くなった。稜線をゆつくりアップダウンしながら高度を下げ、縦走路中で最も低いコンタ二八〇mの鞍部を過ぎると再び高度を上げ、スギ林から岩の多い照葉樹林に変わった稜線を登っていくと、時折り右手北の下方に木佐上の集落、遠くに神崎、更に向こうに新産都の工場が見える。

北側がクスギの造林地となつ

た稜線に出て、明るく見晴らしの良い斜面を登りつめたところに白い花崗岩の境界標識がまづ目に付いた。そしてそのそばにひっそりと小さな四等三角点の石柱がほとんど土に隠れるように埋められていたのが見つかった。地図上の三二九、〇mの地点である。他に何の標識もない鈍頂で注意しないと通り過ぎてしまう所である。昼食地点からここまで四〇分足らずで到着する事が出来た。一時間半はかかるかもしれないと思っていたのに午前中のヤブこぎとは比較にならないほどの速いペースで着いたことになる。

そこから先、コースは南側はヒノキ、北側自然林の境界で、緩やかな下りきつたところから再びアオキの樹林となった。こ

こいらが日豊線の樅木トンネルの上あたりである。

アオキの中の広い稜線を進むとやがて木々の梢越しに前方にかなり高く稜線が見え始めた。

これかうあ登る稜線だ。傾斜が急になるとシイ、カシなどの樹林に変わり、岩の多い急斜面を登り詰める。傾斜は緩くなり、南側が造林地、北側が天然林の稜線を少しづつ高度を上げていく。造林地の境界を登っていくとやがて南側の造林地は台風でなぎ倒された風倒木が縦横にいく手を塞いでとうてい歩いていける所ではないので、北側の灌木の中の歩き易いところを選ん

で登っていく。絶えず稜線から離れないように注意しながら、稜線から少し下がった灌木の中を、かき分け、かいくぐりしながらの悪戦苦闘がしばらくの間続いた。

稜線の傾斜が緩くなったあたりから枝や低木が刈り払われたかすかな踏み跡が現れ、時々目印らしきビニールテープが目につくようになった。矢竹や小さな笹が密集した斜面を過ぎわずかな踏み跡を頼りにジグザグ登っていくとようやくピークらしいところに登りついた。

西側の一部がヒノキ造林となつた灌木の中の小ピークで、真ん中に草に埋もれるように小さな四等三角点があり、そのそばに『藤ノ尾山』と書かれた白杵市山岳会の銘の入ったアルミの標識が立っている。地図には載っていないがこの稜線上の小ピークにはちゃんと山頂名があつたのだ。

時刻はまだ一四時一五分である。ここまでも、午前中の難渋したヤブこぎから比較すると予想外の早いペースで着いたことになる。先を急いだので前の三角点からノンストップで来たが、この分だとエスケープルートを考える必要もなく、御所峠には早めに着けそうなので、明るい木漏れ日の中、ここでゆつくり休憩時間とした。

一四時三〇分、山頂を出発し、南はヒノキの造林地、北は自然

林の境界の稜線を下っていく。それまでのような刈り開かれた跡はないが、稜線ははっきりしており、ヤブもさほど深くないゆつくりとアップダウンの後、大分市、臼杵市、佐賀関町の三市町境を過ぎ、地図上の四二四mの小さなピークを登り越すと稜線は左(南)に折れて下り、再び小灌木林の稜線を小さくアップダウンしていく。

コンタ一三八〇mの小ピークを越したあたりに来たら、下の方からヤッホーという人の声が聞こえてきた。ヤッホーと声を返しながら下っていくと御所峠からルートを開いてい来ると言っていた安部、佐藤先生が待っていた。

両氏がつけておいてくれた目印の木の枝を頼りに快調に稜線を伝っていく。稜線は小さなアップダウンを繰り返しながら照葉樹林の稜線を少しづつ高度を下げていき、明るく刈り払われた南側の斜面に出て少し稜線を登ると三六八、三mの今日最後のピークに着いた。地図には三角点があるように書いているのでみんな探すが見当たらない。ピークからスギの成木林の急斜面をどんどん下ると五分ほどで御所峠に下り着いた。時刻は一五時四五分である。

当初はヤブ又ヤブの猛烈なヤブ歩きであろうと予想していたのに、予想外にうんと早く着けたのは午後のコースが思いの

外に楽なヤブこぎだったからである。

アオキのジャングルとの格闘、灌木林のヤブこぎ、照葉樹の稜線漫歩、フィッシュボット漂うヒノキ林の中と、人里近いのに意外なほどの深さと変化を感じさせるおもしろい山行であつた。



登山と地球環境

本多夏生

人間が地球上で活動するようになって何万年になるか知らないが、地球上の動物で登山行為をするのは恐らく人間だけであり、それも精々ここ百年そこそこであろう。例えば最も古い歴史を持つ英国山岳会(AC)でも百年を超えるだけであり、フランス山岳会(CAF)でも一八七四年設立である。

この百年そこそこで八千米以上の峰はすべて登られてしまい、八千米以下の未踏峰が残っているだけである。

心配なのは主な未踏峯がなく
なつたら登山家はとうするだろ
うかという事である。マツキン
リに登った時、マツキンリ
氷河の末端に多数の針峯群があ
ることを確認したが、ただこの
へんはアブローチが大変らしい
ある調査記録では山側亀裂が大
きいし、氷河の亀裂も大変らし
いのである。氷河上でキャンブ
してると、夜天幕の下で氷河
に亀裂が入る響きでおちおち眠
っておられなかったと記されて
いた。

ところで設立百年記念では、
次世代の登山は月世界の登山で
あると云われたそうであるが、月
には地球より高い山が存在する
と科学雑誌に記されていたが、
山としても岩ばかりで、雪、氷
はないはずだし、重力も地球の
六分の一とされているから、ど
の位の面白さがあるかは疑問で
ある。況して山の高さは一万余
米を超える山があるとしても、山
の高さとは何処から頂上迄の高
さをさしているのだろうか。

地球で海拔で表示されるが、
月では何をもって表示するので
あるうか。そう考えると、地球
上の山の高さは地球誕生当時から
同じ高さではないのではない

か。
地球上でも長い年月の間に大
陸移動があり、インド亜大陸は
アフリカの東海岸から移動して
アジア大陸に衝突して、そこで
ヒマラヤ山脈を押し上げた云

われるが、現在でもその作用が
続いているならば、ヒマラヤは
まだ今よりも高くなつてゆく
ではないだろうか。他方、現
況は第三間氷期という時期にあ
たり、氷河期には地球上の陸地
はかなりの部分が氷河で
おおわれていたが、間氷期に入
つてから氷河は急速に溶けて水
となつて海に流れ込んだとされ
る。その流入は程度の差があつ
ても今も続いているのではない
だろうか。だからこそインド洋
の島々が水没しようとしている
事がよくいわれている。そう考
えると、以前は海面は今より低
かつたわけで、海拔で云えばヒ
マラヤは今より今より高かつた
と云えるわけである。

昨年だったか新聞の記事で、
今の東南アジア海域をオランダ
海軍が測量したデータが残つて
おり、東南アジア各地域の河川
の下流域はそのまま海底に残つ
ていて、大昔東南アジア全体は
一つの大きな大陸だったらしい
とする記事があつた。要は、昔
はひと続きの陸地だった所が、
海水面上昇で徐々に水没して、
今のような沢山の島々になった
ものと考えられる。

同じ事はヨーロッパ地域でも
考えられる。例えば、地中海の
島々に残っている古代ローマ貴
族の別荘の船着場は、今は海面
下になつてしまつて、歴史上有名
なクレオパトラの宮殿はカイロ
港近くの海底から発見されてい

る。
東地中海は火山活動や地震に
よく襲われるため、その為の地
盤沈下あるだろうが、それと共
に海水面上昇もあつて、黒海
である。別の事例として、黒海
沿岸の都市オデッサには、昔の
町の伝説が残つていたが、近年
その近くの海底調査をしたところ、
伝説に云われる通りの町並
みが発見された記事を読んだ事
がある。

白水社から出版された『謎の
古代文明』の中にアメリカ大西
洋岸近かくの海面下に神殿らし
い四角形の建造物が航空写真で
撮影されているし、メキシコ湾
の海底には石の古代道路が発
見されている。又最近では沖縄
の近くの海底に人為的に造物を
施された石造物が発見されてい
る。

更に付け加えると、歌舞伎で
有名な勧進帳の安宅の関は現在
の北陸の海岸から数軒沖合とさ
れており、義経の時代からも海
水面の上昇があつたものと考え
られる。

十年程前琉球大の地質学の教
授の特別講演では奄美大島と沖
縄本島との植物が著しく相異す
ることから、恐らく揚子江の下
流が両島の間を流れている為に
植生が異なるのであろうと述べ
られていたのを興味深く拝聴し
た。

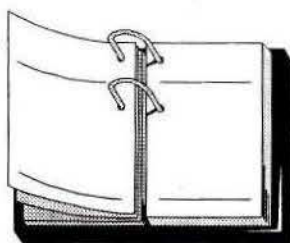
こういうことから考えると、
人類が活動しはじめる以前から

現代まで、海面はずつと上昇
し続けている事は十分考えられ
る事である。そうだとすれば古
代の陸地地形はどんなだったの
か、今よりずっと広がったに違
いないし、歴史上の事象にも色
々と影響を及ぼしたことはなか
つたなかつたのだろうか。太古
アメリカ大陸とアジア大陸とは
アリューシャン列島を橋として
つながつており、アジアから歩
いて渡つた人類が南北アメリカ
大陸の先住民族となつたと云わ
れている。その後、水位の上昇
でアジアとアメリカ大陸は海に
よつて隔てられるようになった
とされている。

フランス調査隊の報告書『タ
ツシリの遺跡』によると、サハ
ラ砂漠の中のタツシリ高地の洞
穴には、古代人の壁画が残つて
いて、それから考えられる事は
その昔サハラ砂漠は森と緑の草
原であつて多くの野生動物がい
たらしいが、その後乾燥化がす
すみ、今の砂漠状態になつたと
述べられている。

こうしてみると、地球環境は
年月と共に変化しており、地球
の温暖化は炭酸ガスの増加とい
う人為所産と、地球の自然的推
移によつて変わつていくと考え
られるが、第三間氷期の終局は
どうなるのだろうか。これにつ
いては、北極の氷が消失して北
極海に海流が流れるようになり、
周辺の陸地に雪を降らせるよう
になつて、第四氷河期に移行す

るといふ説があつた。
ところで、地球上の南北両極
が何故今の位置に決まつたのだ
ろうか。もし巨大隕石が地球の
近くを通過した時、地球の自転
軸が急にずれたり、自転の方向
が逆転する事はないのだろうか。
聖書にあるモーゼのエジプト
脱出の時、日没が急に遅くなつ
たり、紅海が裂けて、その
間に歩いてシナイ半島に辿り着
いたとされているが、丁度この
時刻に巨大隕石が地球の近くを
通過した為に、その引力によつ
て前記の様な現象が起こつたと
する仮説があつた。実際、地球
上の各地にそれを推定される伝
説が残つているとのことであつ
た。それならば、今年の一九九
九年はどんなことになるのだろ
うか？



印象に残った山の本

安部可人

平成一〇年九月の支部会報に本多夏生先生の昔話がある。退院後、佐藤正八君と自宅へ見舞ったとき、先生は帝国海軍の戦記文学もよく読んでいたと知り、共感をおぼえました。実は、私の本棚にも海軍がずらりと並んでいるし、溪流釣りの随筆もかなりありますが、山の本は自慢するほどありません。しいてあげると現在登山全集（昭和三十六年創元社）。

板倉勝宣（楨有恒、三田幸夫と山行中凍死）、田部重治、今西錦司、小島鳥水、木暮理太郎、串田孫一、三田幸夫、武田久吉、大島亮吉等の諸先輩の珠玉の記録が読めます。この人達の本が昭和五一年、覆刻日本山岳名著全二三巻となって大修館書店から発売され、二三年前、私は三九歳、ボーナスから一九万円をはたいて買いました。

まだ袋とじのままの和紙の本売ってしまいたい気持ちもあります。山岳文学の古典、退職した今でも簡単に読めません。二三巻の付録として、日本山岳会、会報（昭和五〇一五年）が一冊にまとめられ、それも手元にあります。昔の漢字、旧かなづかい、小さい活字、楽には

読めません。三二号（昭九、一）に木暮理太郎が二三巻の中の一つ、ウェストン著『日本アルプスの登山と探検』について「その懐かしかった洋書が岡村君（精一氏、昭八）の努力に依つて明快な日本文に訳され、梓書房から刊行され」と紹介しておられる。昔の登山家はインテリが多かった。木暮氏はこの原書を三月で読了したという。この一冊欲しさで一九万円もすてたのに、私は最初の一〇ページだけ、国語科の堀仙三先生と共訳し、今はその労作も粉失してしまつた。当時明治中頃の日本の風俗を描写し、興味深い何とか読み通そうと思うが、（小泉八雲も同じ年、「心」を米国で出版し日本を海外に紹介している。）

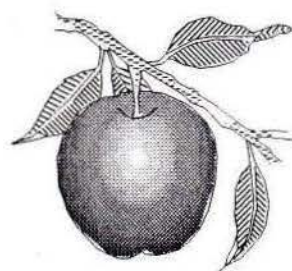
さて、現在登山全集の終わりのところに、日本のアルピニストでは、まず「生まれながらの単独登山者」（藤木九三著）がある。著者は「加藤文太郎君が一月の槍の北鎌で行方不明になつたと聞かされた当初、わたしはまさかと思つた。……」と書き始めている。新田次郎の「孤高の人」の加藤文太郎である。（新田次郎ではこれが一番力作だと思ふ。）

「回想の松濤明」では、凍死するとき残した手記（遺書）で知られる松濤明のことを杉本光作が書いています。もう一つ、わが東九州支部の

神様、今西錦司先生の「初登山に寄す」（『山岳省察』より部分転載）もある。先生の『山岳省察』は覆刻版二三巻の中の一つである。昭和十五年、定価一円八十銭。昔の小島鳥水とちがつて、現代人の文章だから読みやすい。サニー店主よりいただいた今西錦司著「初登山」のはじめに、三十歳代の『山岳省察』は文庫、単行本で読むことができる。しかしそれ以前の若き学生時代のものは覆刻されなかつた。しかし、「初登山」では未発表の原稿などが掲載されたと書かれている。彼のフアンには貴重な資料であろう。持っていない人は買つて読むことをすすめます。

（追記）
宣教師、ウォルター・ウェストンの明治三十年から四十三年までの日本滞在中における登山・講演活動のことが、日本山岳会の「山岳・第八十三年（一九九八）」に詳しく記されている。

明治三十八年三月、彼は小島鳥水、岡野金次郎、武田久吉、高野鷹蔵の四人を昼食会に招待して、日本に山岳会の設立を勧めた。帰国後、英国山岳会（B.M.S.）の会員となつたウェストンの報告から日本山岳会設立を援助することに決めた。その年一〇月「日本山岳会」が創立され、翌年会誌「山岳」が創刊された。



年次晩餐会病

西 孝子

大分空港八時二五分発、羽田一〇時、高輪プリンスホテル着登山靴とザック姿で入るのは私だけ。結婚式場へ入る人の間を、ごそごそ化粧室へ急ぐ。時間をかけてドレスアップ。よそ行きの顔で荷物を預け、人目をさけて居眠り。大変、支部とおきの山の写真がない。木本義雄会員八方手をつくすが、土曜日で目的の店は休み。行方不明を追求せず、支部長と我慢。

一四時「白雲」で、カンチエシンジガ北壁からセルパレス登山五名登頂。「山頂に長居しすぎた？」と下山中二名の尊い命を山に捧げる結果を鎮魂をこめて、谷川太郎隊長の報告を聞き冥福を祈る。

一四時五〇分、第一回秩父宮記念山岳賞受賞者、記念講演。

薬師義美氏のヒマラヤ文献目録著書、翻訳書の刊行について、三枝礼子氏の「ネパール語辞典」の編纂、講演後、三枝氏と会話ができた。同年生まれで、薬学部阪大山岳部で三回遠征に参加し、同時進行で、美大絵画（油絵）科を四〇歳で卒業、ネパール語研究を小さい体で、その情熱に圧倒される。

晩餐会入場開始、一七時三〇分、テーブルマスターと支部会員は指定席で先に入る。石鎚山へ、テーブル六十六で、総務席以外は山名が付けてある。待つ間に名簿を見る。一番若い会員ナンバーは北海道支部九六九番佐々保雄元日本山岳会長である。本部会員が入場すると静かになり、皇太子殿下、妃殿下の入場で、私とテーブルを一つあけて向かいの席につかれ、笑顔があたり空気まで清らかに！

開会の辞、会長挨拶、物故者への黙祷、最後に木下是雄氏元学習院長の乾杯で次のメニューが並ぶ。各種盛り合わせ、洋茸入りオニオンスープ、パイ包み焼き、季節野菜と帆立貝、車海老の炒め、牛フィレ肉のステーキ、エストラゴンソース添え、寿司桶盛り、木の子そば、洋梨のシャルロット、木苺風味、コーヒー。酒盛りの内に、テーブルマスターの司会で自己紹介。すばらしい活動が耳に飛び込む。新入会員、支部会員の紹介がすみ皇太子殿下のご退席で、会

場はざわめき、知人の席へあちこちとかけまわり記念撮影。横のテーブルマスタ重広氏に挨拶。懇親も会場が広く、笑顔の渦である。一年一回のこの空気で、味も色も表現しようのないエネルギーをいただき家路へ。(長男穂高の所へ山行き姿にザックでホテルを出る。皆さん一度この会に出席してみませんか。支部紹介で梅木支部長、木本義雄の三名で淋しい。)

支部事務局 担当者会議

西 孝子

平成十一年二月二十七日
(土)、大分空港八時二十五分
で出発。九段会館に十二時、靖
国神社が近いので散歩に出る。
梅の花が美しい。地方からの観
光バスが多い。大鳥居、社殿と
眺めていると昭和二十年女学校
二年生の時、柳ヶ浦航空隊へ勤
労奉仕に毎日行き、特攻隊であ
る行く人は、シルクのスカーフ
を首に巻いている。母に毛糸の
人形を作ってもらい何度も渡し
た。この人はもう帰って来ない
と思うが、どの人も笑顔で受け

取り、お礼にカンパンいただき
食糧のない時で非常においしか
った。空襲で川岸の大きい防空
壕にかけ込んだり、等々を思い
出し、この日の会議室は二、三
六事件の時のまま改築していな
いと聞き、歴史の重みを感じた
一日であった。

午後一時三〇分～四時三〇分
一、平林克敏会員の講演
七〇年エベレスト、八五年ナ
ムナニ峰初登頂の青年に贈る一
〇章十四頁の小冊子をいただく。
①夢とロマンを持つ、②常に可
能性を求める、③安易な道を選
ばない、④体験し学ぶ、⑤強固
な意志を持つ、⑥個人と国家を
考える、⑦国際性を身につける
⑧豊かな感性を養う、⑨競争よ
り個性を、⑩正々堂々と生きる
この心構えで熱のこもる話であ
った。

各支部とも活動発表、二〇代
会員の入会を願うばかり。今西
祭の行事参加をお願いする。
五時より懇親会。宿泊地グリ
ーンホテルまで中川会員の案内
で夜の東京を二〇分程歩く。九
段より水道橋までサブザックで
歩くと二月の風がほほをなでる。
「あなたは元気だね。」と、他
の人は近くに二次会でくり出し
たが、私はダウン。
二十八日、電車で市ヶ谷へ、
十時より山岳会ルームで会議。
○上高地山研を利用してほしい。
○新日本山岳史について、○海
外登山について、○全国支部懇

談会大垣岐阜支部十月十六、十
七日、○日本山岳会団体保険料
について(東京海上火災)
昼食をすまし一時解散。古代
エジプト展に伊勢丹へ。ハプス
ブルク家コレクション一二六点
をゆつくり見たいが、人が多く
おされて移動する。すばらしい
の一言につきる。長男穂高の所
で一泊し大分へ。



お知らせ

四月月例山行の ご案内

日時 四月二十五日(日)

午前六時〇〇分

サニー発

場所 別府湾コースの御所峠

より行けるところまで

※ 参加の方は三日前までにご

連絡ください。

※ コースの開拓をしますので

ナタ、カマをお持ちの方は

ご持参ください。

※ 今年度の月例山行は別府湾

コースの整備を中心に考
えています。

後記

○ 今回は山行報告中心と云う
より個人の投稿が中心となり
ました。

○ 今後とも会員の投稿で紙面を
にぎわして欲しいと思ってい
ます。

○ 個人の山行記をどしどし寄
せて下さい。お待ちしていま
す。

○ 山行に関するものだけでなく
いろいろの記事が欲しいも
のです。

(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第5号

1999年(平成11年)4月17日

発行者 梅 木 秀 徳

編集者 飯 田 勝 之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八